メノッキオ
大原富枝

メノッキオ

大原富枝

福武書店

大原富枝（おおはら　とみえ）
一九一二年、高知県長岡郡吉野村に生まれる。高知女子師範を結核を病み中退。三八年、「祝出征」が芥川賞候補となり作家生活にはいる。五七年、「ストマイつんぼ」で第八回女流文学者賞を、六〇年、「婉という女」で第一四回毎日出版文化賞、第一三回野間文芸賞を受賞する。著書として他に「建礼院門右京大夫」「アブラハムの幕舎」「地籟」「地上を旅する者」「山霊への恋文」などがある。

メノッキオ

一九九〇年七月一〇日　第一刷印刷
一九九〇年七月一六日　第一刷発行

著者　大原富枝
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒102　電話（03）二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　図書印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　加藤製本

（落・乱丁本はお取替え致します）
（定価はカバーに表示してあります）

©T. Ôhara 1990
ISBN4-8288-2345-X C0093
NDC914 194 244p

メノッキオ　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『町の上で』 7
いでそよひとを 31
男友達 55
湖水日誌 79
メノッキオ 117
「マダム・サド」の夜 149
あらしの日の手紙 185

装丁 田村義也

メノッキオ

『町の上で』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

八木典子の家の石塀の外を、ああ、長いこと彼女に逢わないけれど、元気に暮してはいるんだろうな、と思いつつ、駅へ急いでいたわたしは、ちょうどそのとき、玄関のドアが開いて、女の顔がちらと見えたので、反射的に軽く、

こんにちは！

と声をかけていた。

ところが、びっくりしたようにこちらを眺めている女の顔は、輪廓のくっきりした、鼻の高い外国人の若い女の顔である。

アイム・ソーリー！

少し長くヨーロッパに旅していて帰って来たばかりだったせいで、わたしは驚いた拍子にそう口走っていた。

女は肯くように無言でにこっとした。多分自分が夫の母とまちがえられたのだ、とわかった

にちがいない。
あ、びっくりした。お嫁さんだわ。
独り言をいいながら、足は止めずに過ぎた。
典子の一人息子は三年間ほど、ドイツに赴任していた。名前は忘れてしまったが、なんでも名の通った商社のドイツ支社の責任者だったと思う。
その前はかなり長年、アメリカ支社にいて、ドイツ人女性と結婚することになったのは、その間のことであった。
わたしは何でもなく、息子が愛してるひとなら、フランスだろうが、イギリスだろうが、ベルギーだろうが構わないのよ。ところが親戚の者がうるさくて、わたしストレスになっちゃった。青い眼の孫が生れても平気なのかとか、ね。この齢になって、外国人の親戚もとうとは思わなかったって。あれこれもうるさく言ってよこすのよ。電話とるの、このごろ怖くなっちゃった。
と、煩わしさをうったえて話したりしたこともあった。
その一人息子を、典子がどんなに大切に思っているかは、当然のことながら、折にふれてわたしは思い知らされているのである。
ずっと以前のある日の夕方、そのころはまだ元気だった柴の愛犬をつれて、夕方の散歩に門まで出ると、そこに典子がこころもちしょんぼりしたふうにして立っていて、
ああ、よかった。あなたに逢えたわ。ほんとによかった！

とひどくうれしそうであった。

ものを書いてくらしを立てている、しがないわたしの暮しぶりを、大変な読書家の彼女は大切に考えていてくれて、出来るだけわたしの時間を奪わないように配慮しているようであった。わたしと話したいときは、犬との散歩の時間を待ち受けていて、いっしょに歩きながら話すことに決めているらしかった。

わたしね、今日、あなたにお目にかかれたら、わたしの願いが叶う、もし逢えなかったら、悲しいけれど駄目だ、と覚悟していたの。わたしだけの賭けなのよね。

じつはね、ニューヨークにいる息子がいま重病で危篤状態なの。日本とニューヨークじゃ、何と思ったってどうしようもないわね。ただ祈るだけなの。無信仰のわたしが祈ってどういう効き目があるとも思えないけれど、とにかく祈るだけなのよね。祈っていると不意に閃いたの。今日、あなたに逢えたら助かると。そう閃いたの。

思い詰めたようにいう典子に、わたしは困ったように肯きながら、

あなたの祈りがきっと届くと思うわ。届きますように、とわたしも祈っているわ。

と応えた。

犬の散歩につきあいながら、そのとき典子が息子の幼いときの話をした。

敗戦直後の食べもののないときでしょ。わたし鶏を四、五羽飼ってたの。ご飯が出来てから、庭へ出て、鶏のお尻を眺めるの。早く卵生んでくれないかなあ、と。

息子にね、ちょっとお待ちね、いまに卵生むからねって。鶏のお尻眺め眺めしているとやっと一羽が巣のなかにはいってくれる。ああ、よかったア、って溜息ついて。雌鳥がまだ巣を出ないうちに、ごめんね、ごめんね、って温い卵とり出して、炊きたてのご飯にかけて食べさせたの。

典子は卵を金にかえることもしていた。インフレの日に日に烈しくなるころで、もちろん現金だってほしい。

「うみたて卵あります」

手製のちらしをつくって貼って歩いた。

そのころね、共産党がもの凄い勢いで増えていたの。うちへも党員になれって勧誘員がうるさく訪ねて来てたの。うちのはね、ぐずぐずだから、ぼくはしかしね……っていつまでもためらってるの。だから、わたし、主人の前のテーブルに置かれていた入党申込書を横からさっと取ってきて、自分の名前書いて判こ捺して渡したのよ。だってね、共産党だろうが何だろうが、とにかく食べてゆけるようにしなくっちゃ、どうにもならなかったじゃない。おかみさんたちの集りをつくって、わたし熱心に働いたのよ。

そのころね、徳球さんが話をしにきたのよね、わたしたちの町へ。

「徳球さんが来ます。皆でお話を聴きにゆきましょう」

わたし例のちらしづくりをしたの。屑紙を集めてね。そのちらしのすみっこに小さく書いて

あるの。「うみたて卵あります」って、うちの番地を小さくちょこちょこと書いてあるわけ、ね。それをあちこち、たくさん貼ったの。

さて、その当日ね、夕方ぎりぎりに子供つれて家をとび出したの。通りに出たところで会場へゆく途中の徳球さんの車とばったり出会っちゃったのね。

あっ、徳球のおじさんだ。ぼくたち徳球のおじさんのお話ききにゆくとこだよ。

二歳半くらいだった息子がいきなりそう言っちゃったの。

そうかい、そうかい、坊や、お母さんもお乗りよ。

徳球さんて、なんとも言えない人間的な温みの溢れた人だったのよね。ほかの人だったら、そんなことしたらおかしいけど、あの人はなんでもないの。じつに自然なの。ドアが開いちゃったから仕方ない。息子とわたしと乗ったのね。

あの町の道路って昔ながらの狭い道で、夕方はとても渋滞するのよ。

あのちらし、ぼくたちつくったの。

息子が指さす窓の外の垣根に、ちらしが紐で結びつけてあるの。

え、ちらし？　ああ、あれかい？

徳球さんが読んでるわけ。

「徳球さんが来ます。皆でお話を聴きにゆきましょう」

すみっこの方に「うみたて卵あります」なのよねっ！　息子がしゃべるの。

「うみたて卵あります」も書いたの。
そうか、そうか、「うみたて卵ありますか」か。
徳球が笑っているの。わたし、知らん顔をして外を見ていたわ。
そう、徳球って、そういう人だったんでしょうね、わかるわ。その息子さんなのね？
とわたしは典子の顔を看た。
そうなの、その子なの……
典子の一心が通じたのか、とにかく息子は一命をとりとめ、健康を回復した。
ドイツ女性の恋人との結婚はその翌年くらいだったろうか。
八木典子は頭脳の明晰な人で、話をしていると、何か一つ二つ、あっと思うような楽しいことのある女であった。齢も二つしかちがっていないので、話題の時代の雰囲気が説明なしに通じてしまうのも楽である。女三人、男四人七人の兄弟の真中で、上と下とはみんな大学へやってもらえたのに、真中の彼女だけしわ寄せを食って大学へ行かせてもらえなかった。
姉さんはお茶の水へゆかせたのにお前はゆかせられなくて気の毒だと思っている。お父さんを許してくれ、な。お前はすまないが師範の二部でがまんしておくれ。
父がそう言って詫びた。
弟妹が二人づつまだ下にいて、弟たち方はこれはどうしても大学までやってやらねばならんからな。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com